

保護観察の現況とその対策

京都市N地区の

一号観察を主として

村 橋 元 雄

今日の少年犯罪の特色として青少年白書に於ては「再犯・累犯少年の増加」を発表しており、京都府警本部の統計をみても昭和三五年以降今日まで初犯数は減少しているにもかかわらず再犯数は毎年毎年増加の傾向にある。更に、この再犯数の中でも前回保護観察の処分を受けた少年が最高率を占めている。従つて、今日の少年犯罪対策としては再犯防止対策が重視されねばならないと考えられるのであるが、その中でも特に、保護観察の充実強化の対策がなされねばならないのである。

かゝる観点より私は、保護観察処分少年について京都市管内二七の保護区の中より、特に私の居住地区であるN地区を選び、現在の保護観察がどのように実現されているかを知り、その実情を明らかにすることによつて問題

点を把握し、その認識のうえにたつて、より効果的な保護観察の対策を示唆してみようと考えたのである。

現在の保護観察制度は昭和二四年七月一日に犯罪予防更生法の施行によつて始められたものであるが、その間十五年程しか経っていないので、歴史的には新しいのであるが、同じような事業はそれ以前にもかなり古くから少年保護事業、司法保護事業とかいう名称で行なわれていた。今日の保護観察とは簡単にいえば「再犯に陥入らないで一般社会人として自ら改善更生の努力をしようとする、かつての犯罪前歴者に適等な接触を保ちつつ、一定の守るべき条件を与え、これを軸としてその生活を規制し、その生活の進め方を補導してゆく処遇」である。今日その対象となる者は、京都市内全対象者数一、八八六人中にN地区に於ては一二三人となつている。この中でも一号観察対象者が最も多く、前者の場合六九%、後者の場合は七四%を占めている。こうした対象者は、保護観察者と保護司によつて指導監督・補導援護されているのであるが、実際に担当しているのは保護司なのである。この保護司は、身分上は非常勤の公務員とされている。

るが、どこまでも対象少年と同一の地域に居住し、その地域の事情に精通しているばかりでなく、地域住民の信望も厚く、保護観察に執意をもつ民間人の中から選ばれている。現在、こうした保護司の占めている地位はきわめて大きく、ことにその圧倒的な量は、我國の保護観察制度を代表していると思われる。

そこで、私はこの保護司と対象少年の実態を説明するために、N地区を各学区単位に分析して、昭和三五年以降現在までの状況を調べたのであるが、その結果、今日保護観察の充実強化の対策として論議、論述されている。

(一) 保護司の資質の向上

(二) 保護司の高令化防止と若返りを計る。

(三) 保護観察官の増員

等が必要であることも理解されたのであるが、しかし、現実の具体的な対策として私は、C学区をみたときに、以上の対策では、解決出来ないものである。このC学区はN地区に於て最もケース及び再犯者が多いにもかかわらず、担当保護司は唯一人という状況にある。この地区には、一般地区と異つた特殊な条件をもっている為、保

護観察官や他の地区の保護司が担当しても程んど失敗に終つている。従つて、私はN地区の対策として特にC学区を重要視せねばならないと考え、その為にはまず、保護司を選出することが第一要件と考えられた。しかるにC学区の住民と接触し信頼関係をうる為の七項目の条件を見出したのである。更に地区住民の保護観察制度に対する問題解決として、保護司の審判立合について考察したのである。この審判立合の問題が解決されるならば、私は保護司と対象者及び保護者との間に強い信頼関係が成立して成績状況、接触状況が良くなり、再犯少年が減少するであろうと考えるのであるが、その為には、保護観察所と家庭裁判所の間に生じている司法機構と行政機構の対立感情等少年保護の為の連絡調整を防げる原因を取除くことが第一要件と考えられる。

要するに、対象少年にとつて保護観察制度が機関の果たす役割がいかに重要なものであるか、又一人でも多くの対象少年が健康な市民として、社会に復帰することがどれ程社会浄化、社会福祉の上にプラスとなるか、このことを考えると、こうした制度や機構に対する関係各方面

の焦点的な配慮が強く望まれるのである。

中学生の家出とその対策

嶋 村 功

青少年の非行と交通戦争、これは今日の我々にとつて重大な社会問題であり、しかも我々の身近な問題として存在している。交通問題はさておき、青少年の非行化の問題は、児童の保全育成の理念からすれば重大な問題である。

私が取りあげた家出は、厳密な意味では非行とは言えないが、非行への危険性の著るしい問題行動である。これについて中学生と言う時期における家出が如何る理由で又その根底に存在するものであるかを究明するものである。諸般の事情で原因の把握と対策への指向に終つたことは残念である。

先ず児童の家出とは如何るものであるかについて究明してみたのであるが、親からすればそれは悪い行動であ

り、愛情や信頼が裏切られたと思つてゐる。しかし、その行動について深く究明すれば、結局は正常な児童のニードが阻害されたことによつて、不安定（心理的に）におちいり、それをもとの安定した状態に戻すために行なわれた回復行動なのであるが、それが社会的に容認されないために問題行動とされるのである。ヒーリーの言葉を借りるならば、非行とは、自己表現の様式であつて人格全体の現れではないと言えるのである。

我々はよく理由なき殺人、家出、反抗と言つた言葉を聞くが、これは重大な誤りである。即ちその行動の原因をよく理解してゐなかつたからであると言える。

非行の多くは準備状態と言う人格的環境的なものから生じる。心理的不安定状態と非行文化への感化から生じた。社会的行動基準の偏倚状態又は両者の混合した状態の上に、何か機会的な動機が作用したときに顕在化するものである。このメカニズムは家出にも通ずるもので、家出は、結果にすぎないと言える。

ところで中学生期は、児童から成人への移行をなす時期で、身体的にも精神的にも大きな変化を示す。身体的